



# よつば会だより

2016 年 5 月号

発行:NPO 法人

尾道こころネットよつば会事務局

尾道市 栗原東 2 丁目 17-86

TEL・FAX 0848-37-6600

4月14日に最初の揺れを見た熊本地震は、その後も連日余震が続き、4月26日現在死者49名、安否不明1名、建物の全壊1696戸、半壊1613戸という大惨事になりました。直下型地震で津波の発生はなかったものの、現在も避難生活を余儀なくされている人は約4万8300人にのぼります。多くのボランティアが熊本に集まり、また、政府も熊本地震を激甚災害に指定し、復旧に総力を集中するとしています。再び日本人の真価が問われる状況になりました。しかし、被災住宅から物を盗みだすという腹立たしく、悲しい報道も伝わってきます。被災地の皆さんが1日も早く安穏な日常に戻るよう祈りたいものです。



## 初めてのロールプレイを ～「家族の SST」報告～

4月22日に今年度最初の「家族の SST」を行いました。参加者は10名でした。いつものように気分調べからスタート、「子どもが家で一緒に生活しているが、自己中心で反抗的。どうしたらいいのだろうか」という苦悩などが話されました。それでも、ある母親から「殆ど閉じこもり状態だった娘が、訪問看護の人に来てもらいだしてから気持ちが外に向くようになった。親子の間の会話も多くなった、第三者に入ってもらってよかった」という明るい話もありました。その後、自由に話し合っている中で、ある参加者の女性から、息子さんが反抗的だという話の中で次のような食事での会話のやり取りが話されました。

母親: 「かぼちゃは栄養があるし、今日炊いたものだから食べたら」

息子: 「欲しかったら食べるよ」

母親: 「あなたは全然食べてないわよ」

息子: 「かぼちゃは糖質が多いんだよ」 (息子さんは血糖値がちよっと高めです)

母親: 「そしたら、ご飯を減らして、かぼちゃを一切れでも食べたら」

息子: 「うるさいなあ、栄養のことはオレの方がよく知ってるよ」



このやり取りを聞いた他の参加者から、「ロールプレイでやってみよう」という提案がなされ、会話をホワイトボードに書きました。ロールプレイは SST で行われる技法の一つで、上記のような会話を参加者に演じてもらい、母親の気持ちを、また、子どもの気持ちを感じ取ってもらうものです。そして、参加者に会話の中でいいところを見つけ出してもらい、また、どうしたらもっといい会話になるかを考えてもらうものです。今回もこの母子のやり取りを考えてもらう中で「欲しかったら食べる」という答えは、食べることを拒否しているものではない。やわらかい、よい返し方ではないか」という指摘がありました。これはいいところですね。

次に「これだけ食べる言われたら、誰だって食べたくなくなる」、「息子さんの、支配されたくないという思いが見え隠れしている」という指摘がなされました。この二つはもっといい会話にするために考え直したいという指摘です。そして、どう考え直すかに対して「欲しかったら食べる」と答えたとき、さらに食べさせようと言葉を重ねるのではなく、『ああそうなの、欲しかったら食べるのね』と受けとめて後は何も言わない方が、息子さんもかぼちゃに手を出していたかも知れないでしょうね」という意見が出されました。

今回の SST で、初めてロールプレイを行うことができましたが、たまたまロールプレイ向きのいい会話材料が出てきたからであって、ロールプレイで学ぼうというはっきりした意図をもってのものではありませんでした。しかし、これからロールプレイを取り入れての学びの SST を行っていく、いいきっかけになりました。

### 4月の活動報告

- 10日 当事者との交流会 (サロンよつば)
- 22日 家族の SST (市民センターむかいしま)

### 5月の活動予定

- 08日(日) 当事者との交流会 (サロンよつば)
- 13日(金) よつば会総会 (市民センターむかいしま)  
(兼:よつば会家族教室)





# 家族相談の一事例紹介

## ～望まれる医療、福祉の支援体制～



「みんなねっと」から「**精神障がい者家族 相談事例集**」という冊子が、よつば会にも送られてきました。内容は、全国の家族会の定例会や相談会で、実際に受けた相談に対する取り組みを紹介しているものです。「みんなねっと」に全国の家族会から寄せられた65事例の応募の中から、厳選した32事例を今回の冊子に掲載しています。冊子の内容を少しでも知ってもらうために、「親亡き後」のところの「障がいのある姉妹と病身の母との関わりで心に残ったこと」というタイトルの事例を要約してお伝えします。

事例は母親と娘さん二人の家庭で、娘さんの二人とも精神障害者でした。娘さんの1人が調子を崩して、お母さんがその子にかかりきりになると、それを見ているもう一人の娘さんも調子を崩し、結局二人とも入院してしまうということを繰り返していました。娘さん二人がそれぞれ信頼している先生は病院が違うために、入院するとお母さんは2つの病院を見舞いに回られ、疲れ果てていました。お母さんは過労とストレスで、以前に癌を患って手術もされていましたが、自分の入院や手術の時も、誰にも頼れず苦勞されたということを知っていました。それでも家族会にはいつも参加され、明るく振る舞われ、医療や福祉のことをよく勉強されていました。そうこうしているうちに、お母さんは癌が再発してターミナルケアのある病院に入院しました。お見舞いに行き「何かできることはないですか」と聞くと、「娘のところに誰も見舞いに行けていない。代わりに見舞いに行ってお菓子など差し入れてもらえると嬉しい」と言われました。娘さんの病院に早速見舞いに行きましたが、病院では家族でないので面会はできませんと断られ、何とか差し入れのお菓子だけ受け取ってもらいました。やがてお母さんは亡くなられ、葬儀は病院で行われました。私はその母子3人に「何もできなかった。しなかった」という思いが棘(とげ)のようにずっと胸に刺さっていました。

それから5年後、ずっと入院していた娘さんから電話がありました。娘さんは退院してアパートで独り暮らしをしながら病院のデイケアに通っているということでした。すぐにアパートを訪ねて娘さんと話しました。娘さんは、お母さんが亡くなったら自分はどうなるか分からなくて不安だったので退院できなかったこと、後見人の方がよい方で粘り強く退院を勧めてくださって決心できたこと、今は落ち着いて暮らしている、などを話してくれました。お会いしたときは可愛らしい服装で、お部屋もきれいにされており、住み心地が良さそうなので安心しました。亡くなられたお母さんも、これを見ればどんなに喜ばれたことかと思いました。娘さんは、「母の分も自分の分もお礼を言いたかった」と話され、私はその言葉にとても感動しました。そして「私は何もできなかった、しなかったという胸に刺さった棘」の痛みも和らぎました。

### コメント

(全ての事例に編集委員からと思われるコメントがついています)

病気の娘さん二人を残して亡くなられたお母さんの気持は、如何ばかりだったか。本当に心の痛む事例ですね。自分の力が及ばず悔やんだと言われる相談員の方、十分力を尽くされたと思います。しかし家族会で他の家族を支援することで、お母さんのストレスも軽減され、後見人の制度を利用することも学ばれたことと思います。よい後見人をつけられたことが、お母さんの願いを実現することにつながりました。お母さんを孤軍奮闘させないで支援し、親が元気なうちに関係者が支援してくれるような医療、福祉の体制が欲しいとつくづく思いました。それにしても家族以外の面会を頭から認めないという病院もおかしい。せめて入院当事者本人の意向を聞くべきでしょう。これは永年の精神科病院の閉鎖性がもたらせた問題です。

以上、事例の要旨です。関心を持たれる方はぜひ冊子を手にとってみてください。